

神取 道宏 著

## 『ミクロ経済学の力』

(日本評論社、2014年9月)

木原 匡

年末年始の大学教員の悩みといえば、センター試験の監督であるが、評者にとってはそれ以上にシラバス作成が苦役である。何年も前から変わり映えしない自分のシラバスを読み返しては、見落としていた誤変換をこっそり修正し、計画通りに授業が進まなかったことに落胆し、受講者や授業料負担者からのクレームに怯える。そんな中での楽しみは、この1年に出版された新しい教科書と公務員試験の最新の過去問をチェックすることである。今年最大の収穫は、神取道宏著『ミクロ経済学の力』であった。シラバス作成に追われてざっと読んだときは「英語で書かれていないことが唯一の欠点」と感じたが、改めて読み返すと「日本語で書かれた最後のミクロ経済学教科書」との結論に至った。

本書は、東京大学経済学部教授である神取道宏先生が、経済セミナー誌に「あなたを変えるミクロ経済学」として連載したものをまとめた書籍である。最大の特徴は、帯でも強調されているように、経済学を学ぶ大学生・大学院生だけでなく、政策立案者である政治家・公務員、高校生2・3年生、広く社会人をも対象として書かれていることである。つまり、この1冊で教科書とビジネス書の両方のマーケット（もちろん後者の方が大きいマスだ）をターゲットとする壮大な野心の下に出版された。ビジネス書としての成功はさておき、この野心の副産物として教科書としての完成度も一段と高まっている。

第I部の価格理論は、第1章：消費者行動理論、第2章：企業行動の理論、…、とオーソドックスな構成だ。第II部のゲーム理論と情報の経済学でも、第6章：同時手番のゲームとナッシュ均衡、第7章：時間

を通じたゲームと戦略の信頼性、…、とどの大学でも2年次のミクロ経済学で扱っている領域を、既存の教科書と同様の順序でカバーしている。しかしながら、各章の構成、説明の仕方には特徴的な多くの配慮が見られる。

第1章では、選好→効用関数→無差別曲線→予算制約までは、初学者でも読み進められるだろう。次の限界分析で微分がわからない（忘れた）という読者が一定の割合で出現し、その後の補償需要関数、支出関数の導出で息切れしてくる方が多数発生と想像できる。537ページ中の60ページあたり、山登りに例えると1合目付近で最初の難所が訪れますが、大丈夫です。諦めないでください。一度読んでわからないまま進んでも、次の所得効果と代替効果は理解できる上、その前の補償需要の理解も取り戻せるようになっている。つまり、ひたすら上り坂が続いていくのではなく、多少の難所を超えると必ず見晴らしのよい平地が現れるので、読者は安心して進んでいただきたい。難所を乗り越えた途端に行き止まり…ということも、本書ではない。最初から順に読み進めていくことがベストだが、途中で一時中断してまた読み直したり、興味のあるところから読み始めても差し支えない。先ほどの所得効果と代替効果は、ミクロ経済学では誰でも苦勞するところである。説明しだすと面倒な補償需要関数を避けて、その結果かえって説明がわかり辛い教科書も多い。それに対して、難所と想定される場所には予め手すりや足場をこれでもかというほど整備して、丁寧に乗り越えられるようにして、気がつけば先回りをしてるのが本書の特徴である。

理論と現実をつなぐ事例紹介も本書の魅力である。

詳細にデータを示した非常に手の込んだ事例は、これまでの教科書とは一線を画すもので、社会人を含めた読者の興味を惹くに違いない。著者の真摯な努力に敬意と謝意を表したい。中でも評者が感心したのは、3.2節のコメ市場の余剰分析からTPPを論じたものである。農水省が公表している限られたデータから米作農家を規模別に分類し、コメの供給曲線を導出、輸入自由化後の国内生産と所得分配への影響を明らかにしている。抽象的な余剰分析ではなしえないインプリケーションをも生み出している。この部分では、時間をかけてでも自分の足で一歩ずつ議論の組み立てを追っていただきたい。

第Ⅰ部の価格理論ではこれまで紹介した以外にも、洋書を含めた既存のミクロ経済学教科書を圧倒する記述で満たされている。第Ⅱ部のゲーム理論は、神取先生の専門分野という期待が高すぎたためかもしれないが、率直に言って第Ⅰ部ほどの圧倒的な力を感じることはできなかった。章が進むほど、事例が第Ⅰ部のものほどは周到かつ斬新ではないためかもしれない。ゲーム理論は研究途上で、価格理論に比べると細部の仮定に依存せざるを得ないために、明瞭な説明が困難な事情もある。とはいえ、読みやすかつ丁寧な記述であり、最後まで読み通すべき価値があることに疑いはない。

経済セミナー誌連載時のA4二段組みを、ほぼそのまま書籍化したレイアウト面の弊害が散見されることは残念である。例えば、pp.27-29の事例1.1では3つの図があるが、いずれも図の前後の改行が省略あるいは行間が詰められているため、本文と図の境界が不明確だ。また、事例部分のグレーの背景色やその中にさらに強調の青の背景色が入る (p.387) と、読者の視覚を混乱させる。フォントの大きさに対して行送りが苦しいのは最近の書籍に共通することではあるが、本文のリユウミンは横書きで行送りを狭めることには適していない。同じ級数と行送りでも、本文を例えばイワタUD明朝にするだけで、ずっと読みやすく文体の「ドライブ感」も生きた教科書になったと惜まれる。さらに細かいことだが、図表の見出しと本文中の強調部分で同じゴシック体を使っているのもいかなものか。図表は見出し部分も含めて、本文とは異なるフォントとすれば、行送りを詰めても図表が浮き立っ

て見やすくなるだろう。

本書がターゲットとしたい社会人読者に推薦できるだろうか？ 答えはイエスである。数学は高校数Ⅱの微分が必要最小限使われているだけで、ウン十年前でも一度でも微分ができた人なら、思い出してできる程度に抑制されている。難所は、数学よりも日本語での説明の部分に多いことには、同意していただけるだろう。読み手を選ばないものの、「数学がわからないから」という言い訳を許さない恐ろしい教科書ともいえよう。

最近出版された同レベルの教科書としては、奥野正寛『ミクロ経済学』(東京大学出版会、2008年)、林貴志『ミクロ経済学』増補版(ミネルヴァ書房、2013年)などがあるが、記述のポリシーは大きく異なる。日本語の読み物として、ミクロ経済学の理解を導くのが本書を貫く特徴であり、章末に練習問題がないことも、索引が語句の最初に現れるページのみを示していることも「読み物」としては自然なことである。

最後に、評者が来年度のシラバスで本書を教科書指定したかを説明する。大変心苦しいが、答えはノーである。仮に本書に沿ってミクロ経済学の講義を進めると、2週目の限界分析の微分で拒否反応、履修者激減…が、第一の理由である。これは社会科学系を標榜する学部のアドミッションポリシーと初年次教育の問題であって、もちろん本書の欠点ではない。もう一つは、本書の内容を教室で再現できそうにないことだ。簡単なレシピに見えるのに家で作ってみるとお店の味は出せない、というような難しさがある。同じように手の込んだ「読み物」タイプのN・グレゴリー・マンキュー『マンキュー経済学Ⅰ ミクロ編』第3版(東洋経済新報社、2013年)なら、誰でも準備なしに教科書通りに教えられる(よくできた冷凍食品?)のとは対照的である。本書は教え手を選ぶ教科書である。だが、それも時間の問題かもしれない。MOOCで神取先生のレクチャーが配信された日には、反転学習で学ぶクラスで『ミクロ経済学の力』の問題演習やディスカッションをサポートするのがミクロ経済学担当教員の仕事となるだろう。教員がシラバスで指定して学生に購入を求めるミクロ経済学の教科書は、本書の後には出現しないかもしれない。